

大学における映像制作の教育的価値 ～新体制2年目を迎えた「いるプロ」とゼミの実践報告 その成果と課題～

間島 貞幸

【要旨】 本研究は、メディア・リテラシー教育としての映像制作の教育的価値を検討するものである。ここ数年中央大学 松野良一 FLP ジャーナリズムプログラムゼミや東海大学 五嶋正治 ミネスタウェーブなどにおいて学生に映像作品を制作させて地元CATVで放送する例が増えているが、その具体的な教育内容と方法については各大学で試行錯誤が続いていると言える。今後は映像制作における教育的価値について理論化することが重要である。そのために実践事例を蓄積化することが必要不可欠で新たな実践事例として筆者が担当する「いるプロ」とゼミにおける映像制作の実践を報告する。その結果、映像制作実践は、多様な教育的効果があることが推察され、学生による課題レポートによってもその効果がうかがいしれる。大学における映像制作の教育的価値について考察する。

【キーワード】 メディア表現、情報発信、デジタル映像、実践教育、映像制作、メディア・リテラシー教育

1 はじめに

大学教育におけるメディア・リテラシー教育の一環として、学生に映像作品を制作させる例が増えているが、その具体的な教育内容と方法については各大学で試行錯誤が続いている。多様な教育的効果とその重要性を指摘した報告には以下のようなものがある。例えば、松野^[1]は、映像制作による学習効果として(1)「メディア・リテラシーの向上」(2)「感性の向上」(3)「集団作業を円滑に進める能力」(4)「コミュニケーション能力」(5)「積極性、精神力に関する能力」をあげている。塚本^[2]は、ゼミによる地元CATVの番組制作を『「視点」を『カメラ』という『道具』を利用して視覚化することによって他者の視点に気づくことを目的とした異文化間教育の実践授業の一環』と位置づけている。五嶋^[3]は、映像制作教育の意義として「企画・発想力の育成」「プロデュース力の育成」「文字表現力の育成」「総合的判断力の育成」「視聴者・客観視力の育成」などをあげている。今後は、映像制作における教育目

標や演習のノウハウなどについて関係者による情報交換を積極的に行い、その教育的価値について理論化することが重要である。そのために事例の更なる蓄積が必要と考えている。新たな実践事例として筆者が担当する「いるプロ」とゼミでの映像制作の実践を紹介し、大学における映像制作教育の課題について考察する。

2 本研究の目的

筆者は、2009年2月まで20年間にわたり東京キー局のディレクターとして多くの番組の制作に携わってきた。その経験から、「映像制作は、そのプロセスにおいて多くの困難な状況に直面する。それらの問題を仲間と共に解決しようとする行為そのものが様々な能力開発につながる」と考えている。学生の映像制作における教育的価値を探る研究において以下の具体的な目標を考えた。

- ① ビデオカメラやパーソナルコンピュータなどのデジタル機器を道具として自由自在に使いこ

なし、映像コンテンツを制作するための基本的な技術やスキルを獲得する。

- ② 映像コンテンツのクオリティよりは、制作におけるプロセスを重視する。そこでグループワークによる仲間との協調性、また地域の人たちと積極的に関わることで社会性やコミュニケーション能力を育成する。
- ③ 映像コンテンツの制作方法を学ぶことで、実際にテレビ放送されている番組の手法などを理解し、批判的視聴能力を養う。
- ④ いるプロに関して、活動グループ全体として映像制作の技術やスキルを高めていくために、継続的に活動する。また新たに参加する学生に対して指導できるよう能力を養う。

3 制作環境

「いるプロ」での実践とゼミにおける実践では、制作環境が異なる。まず「いるプロ」の実践について、打ち合わせ等は筆者の研究室で行った。撮影には、メディアセンターのビデオカメラ（DVCテープに記録するタイプ）を使用。編集はメディアセンターと入間市の「ふれあいハウス」のパーソナルコンピュータと編集ソフトEDIUSを使用して行った。なお、編集ソフトEDIUSは、入間CATVで実際に使用している編集ソフトであり、制作上の互換性を持たせるためである。一方、ゼミでの実践について、撮影は、2009年9月に完成したメディア工房のビデオカメラ（ハードディスクに記録するタイプ）を使用。編集はメディア工房のApple社のiMacと内蔵の編集ソフトiMovie09を使用して行った。

4 実践研究

「いるプロ」およびゼミの実践として、駿河台大学の学生が企画制作する入間CATVの地域密着型番組「発見！駿大い

るプロ情報局」（2006年4月よりスタート、毎日2回 午前9時30分と午後5時30分から放送の15分番組）の番組制作を行った。

4.1 「いるプロ」の実践

1) これまでの問題点

- ① 継続的に活動を行う学生が少なく、一向に番組制作スキルがあがらない。
- ② 活動自体が毎週決められた授業として設定されているわけではないため、メンバー全員が集まってミーティングを行うことは困難である。指導する機会が必然的に撮影時や編集時などに集中し、指導を受けるのは活動に熱心な一部の学生のみに限定されてしまう。
- ③ 番組制作経験のない学生が、毎日1本15分の番組を作ることは容易ではない。
- ④ 編集できる時間が少ない。平日は授業の終わる夕方から夜の7時まで、土曜日は午前9時20分から夜の7時まで、日曜日はふれあいハウスにて午前10時から夜6時までと限定されており、番組制作の経験のない学生にとってはかなり厳しいといえる。

2) 「いるプロ」の実践



写真1 発見！駿大いるプロ情報局



写真2 収録風景①



写真3 収録風景②

2009年6月に、いるプロCATV班の指導を担当することになっておよそ一年が経過した。当初、活動を希望する学生は0人であったが、番組制作活動の評判を聞きつけて、3ヶ月後には30人を超える学生が集まった。その時、学生に伝えたことは「いるプロの活動は、単位の取得のみを目的とするのではなく、学生一人一人が、番組制作のプロセスの中で培われる様々な能力を獲得することを目的にしてほしい」であった。

基本的に、地域に向けた大学の取り組みを紹介する番組を制作していったのだが、授業での実践とは異なり、番組制作のノウハウを学べるのは、ほとんどが、取材現場においてである。番組の全体像について事前に理解してから取材に臨むものの、経験が少ないため、何をどのように撮影すればよいのか、現場で途方にくれてしまい、後で撮影した映像素材をチェックしてあまりのレベルの低さに学生らは、がく然とする。そして「どうすれば手ぶれしなくてきちんと撮影できるのか、現場で何を撮影すれば、その状況をわかりやすく紹介することができるのか」など次から次へと疑問が彼らの中に湧いてくる。この疑問こそが、学生たちにとっての学びのきっかけとなる。番組制作は、特に当番制にしないでそれぞれの自主性に任せており、やりたい学生が集まって行われている。毎回、グループのメンバーが変わり、ディレクターやカメラ、編集などの役割担当も変わる。学生たちは、番組を制作する過程の中で学生同士や地域の人と多くのコミュニケーションをとりながら着実に番組制作のノウハウを獲得しつつある。そして4年生が卒業し、2010年4月、実質活動しなかった学生らが抜けて15人ほどがそのまま残り、新たに20名を超える1年生も参加することになった。新体制となって2年目。これを機に試験的にはあるが、リサーチから企画、演出、撮影、編集、納品まで、さらに後輩の指導に至るまで学生が自主運営、

管理することにした。まだまだともに番組を作れるレベルには至らないが、「教えることは最大の学びである」ことを念頭に社会性に富んだ良質な作品をたくさん社会に向けて送り出すことを期待している。

3) 研究成果



写真4 ある塾講師の挑戦！



写真5 駿輝祭 2009の魅力



写真6 生涯学習フェスティバル



写真7 入間 桜巡り



写真8 チェアスキーヤー
鈴木猛史くんの挑戦！

4) 実践に関わる気づき～学生のレポートより～

「15分番組を作るのに何十倍もの映像を撮影した。しかし、手ぶれがひどく、またアングルが良くなかったため、実際に編集で使える映像が少なかった」

「15分番組を完成させるのに、ほぼ毎日作業して約1ヶ月かかった。番組制作は、とても時間のかかる、根気のいる作業だということがわかった。そして番組がテレビで放送されているのを見たときは

とても達成感を感じた」

「地域の人にインタビューするのは簡単だと思っていたが、実際難しかった。街頭インタビューでは、話しかけるのに勇気がいる。現場でコミュニケーションをとり、信頼してもらい、いかに本音を聞き出すかが重要であり、また一瞬の表情も逃さないよう常に神経を集中しなければならないことがわかった」

「ビデオカメラでただ撮影すればよいのではなく、編集のことを考えて何をどれだけ撮影すればよいのか、考えることが重要だ」

「撮影で良いシーンが撮れても、途中でカメラが動いてしまっただけでは編集で使いづらい。一定時間きちんと止まって撮影するべきである。カメラを動かすのなら、意味のある動かし方をしなければならない」

「15分番組を作るとき、最初は長めに編集することが重要だ、ということがわかった。余分なシーンをカットしていくのは簡単だが、短くまとまってしまう映像に新たなシーンを追加するのは難しい」

「番組を作るためには撮影や編集などの技術を学ぶだけでなく、みんなと協力して一つのことを完成させる難しさや大切さを学んだ。きちんと連携がとれなければ、面白い番組は作れない」

「番組を作ることは楽しそう、と最初思ったが、実際やってみると楽しいだけでなく、番組を作る難しさも感じた」

「撮影するときはその映像を見て内容が伝わるようになっていなければならないことがわかった」

「いくら良いシーンが撮れたとしても編集次第でずいぶんとその印象が変わる。番組を作る、ということがいかに難しく、大変であるかということがわかった」

「番組は多くの人が関わって一つのチームで作るものだ。一人一人がバラバラの考えでは面白い番組は作れない。また一人一人が責任を持って取り組まなければうまくいかない。そのためにお互いコミュニケーションをしっかりとることが大切だ。要するに自分の考えを他の人に伝える、相手の意見を聞いてたたく理解するという能力が必要だ」

「インタビュー取材では、時に自分を表現し、時に人を受け入れるということが大切である」

「撮影する人と編集する人が違うとき、撮影する前にその狙いや撮影内容についてもっと話すべきであったと痛感した。撮影と編集に1ヶ月かかり、とても苦労したが、番組が完成したとき、ほっとしたのと同時にこれまでがんばってきたことを楽しいと感じることができた」

「いるプロの活動は、映像制作に興味のある学生が自主的に参加するものなのでみんな積極性があり、意欲的でとても貴重な経験をした」

「インタビュー取材では取材相手への言葉遣いや良いコメントがもらえるような質問のしかたなどを知ることが出来た」

「編集をしているとき15分番組という決まりの中でどうしたらわかりやすく、見ている人に楽しんでもらえるか、考えながら作業することが大変だった」

4.2 ゼミⅠ・Ⅱの実践

1年間を通して入間CATVで放送する15分番組の制作（企画から演出、撮影、編集、ナレーション録音、仕上げまでの作業）を行ったが、重視したのは作品のクオリティよりも番組制作の中で起こる様々なアクシデントに対し、いかにグループで問題解決していくか、についてである。完成した作品は社会に情報発信して達成感や責任を感じてもらおうよう、各種映像祭に積極的に出品することも目標とした。学生は15人。そのほとんどが映像作品を制作するのは初めてであった。春学期では、主に基本的な番組制作の方法と入間地域の魅力を伝える番組の企画を行った。以下は春学期の授業実践例である。

- ・テレビ番組のメイキングVTR紹介～テレビ番組の制作方法、役割分担の理解
- ・入間地域の特徴をリサーチする
- ・入間地域の魅力を伝える番組の企画書を1人1作品以上作成
- ・番組企画のプレゼンテーション～企画コンペで4作品に絞る
- ・グループごとに企画内容を検討

- ・グループごとに再度、番組企画のプレゼンテーション～企画の決定

番組を作る上で一番重要な企画にかなりの時間を要した。あくまでも他者（視聴者）を意識することが企画理念の基本とした。リサーチはほとんどが授業時間外の作業となった。インターネットで調べる以外に実際に担当者に会いに行き取材するなどしたが、電話で担当者にアポを取り、初対面でいろいろな話を聞いてくることに慣れていない学生たちは、かなり戸惑った様子であった。さらに15の番組企画から4つに絞る作業が難航した。ゼミがスタートして間もない頃だったせいか、学生たちはお互いに遠慮しあっている様子で簡単に4つに絞ることができなかった。夏休み前には、撮影に臨む前段階の準備として、番組の制作スケジュール表とロケ用の構成台本の作成を行う予定であったが番組の企画が遅れたため、夏休みの宿題となった。

秋学期は、撮影から仕上げの作業。以下は秋学期の授業実践例である。

- ・グループごとに番組制作スケジュールの報告～取材相手に撮影の交渉
- ・番組構成台本のチェック
- ・撮影本番、パソコンへ映像素材の立ち上げ、編集、オフラインチェック、編集直し、ナレーション録音、作品完成
- ・番組上映会（ビューイング）
- ・レポート作成
- ・記録メディア（DVD）の作成

グループワークでは特に一人一人が主体的に行動すること、他人のために労を惜しまないで行動することを強調した。それまで撮影に関して基本的な撮影方法しか教えていなかったため、1グループに1回、筆者自身が撮影に同行し、いかに取材相手と信頼関係を結び、自分たちが撮りたいものを撮るか、など実際にやって見せながら実践的な指導を行った。撮影、編集などの作業はほとんどが、授業時間外の作業となり、途中で追加撮影を行うグループもいた。15分の番組を制作するのはとても時間がかかるが、学生たちは、自主的にグループで集まり、

年末ぎりぎりまで、そして学期末のテスト期間が終了しても追い込み作業に追われた。

1) 研究成果



写真9 加治丘陵の魅力



写真10 野田双子織り～復活に懸けた西村さんの想い～



写真11 異国情緒漂う館 西洋館



写真12 お茶を食べよう

2) 実践に関わる気づき～学生のレポートより～

15分番組を1年かけて制作する中で起こった様々な失敗を乗り越えて、学生たちにとって実に多くの学びがあった。

「取材相手に電話で出演交渉する際、緊張してしまい、自分で聞きたいことや伝えたいことがうまくできなくて落ち込んでしまった。事前に紙などにまとめてシミュレーションする必要があると感じた」

「撮影する前に番組の企画や構成がきちんとできていなかったため、後で必要だと思っていたカットが撮れていなかったり、カットの長さが短くて使えなかったりした」

「全体的にナレーションによる説明が多く、紙芝居のようになってしまったので途中から生の音や現場で話している声をできるだけ入れるようにした」

「番組制作で学んだことは“自ら行動することが大切”ということ。自分の意見を積極的に言う。疑問があったら率先して先生に質問する。空いている時間を見つけて、自ら進んで編集を行うべきだと感じた」

「今回の映像制作で初対面の目上の人と話すことの難しさやグループで動くことの難しさや楽しさを経験することができた」

「グループの中で意見が分かれたときに決断することがとても難しいと感じた」

「みんなの考えや意見を取り入れて一つの番組を制作したが、うまくいかなかった。もっと話し合ってみんなが納得する意見だけを取り入れるべきだと思った」

「映像作品を作る上で一番大切なことは、構成だと気がついた」

「作品作りに没頭して周囲が見えなくなり、人に見せられる作品を作るどころか自己満足の作品になってしまった」

「インタビューをするときにいかに相手の緊張を和らげるかが重要だと思った」

「自分たちが普段何気なく見ているテレビも実は裏ではかなり試行錯誤を繰り返しているのでは、と思った」

「性格的に引っ込み思案で人見知りしてしまう性格でしたが、番組制作を通じてそれらが改善されていきました」

「今までは“こうしたい”“ああしたい”と思うこ

とが少なかったが、今は“もっと良くするには”と考えるようになった」

「作品作りでは反省すべき点が多かったが、“ならばどうすべきか”という考え方を学べたことが大きかった」

「作品を高い完成度に仕上げるには、細かな段取りを早い段階で決定し、追加撮影はよほどのことがなければできないものと考え、どのような作品ができるか全員で共有できている状態で撮影に臨まなければならないのだと気づいた」

「密着取材しているグループではその場その場で率直な感想を述べていた。その方がより臨場感が増すのではないかと思った」

「作品を初めて見る人の気持ちになって構成やテロップの大きさなどを工夫する必要があると感じた」

「取材をしていて強く感じたことは“挨拶の大切さ”です。挨拶をきちんとすることで取材相手も挨拶してくれて、そこからいろいろなお話を伺うことができた」

「映像作品を作る上で“慎重さ”を心がける気持ちが必要だと感じたが、その中にもほんの少しの“楽しさ”も必要だと感じた。その方が見る側にとってもすんなりと次のシーンへと気持ちが移動すると思った」

「グループ制作では、まず自分の考えを言うことから、次に意見を求めるように問いかけることが大切だと感じた。何よりもまず伝えようとする気持ちが大事です」

「どんな場面でも、どんな些細なことでも“人”と“会話”は生活していく上で絶対に切っても切れない関係なのだ実感した」

6 おわりに

この1年間、大学で映像作品を制作する意味をずっと考えてきた。いるプロでは、放送枠があって作品を発信していかなければならない必要性から、番組制作未経験ながら1年生を中心に現場で試行錯誤しながら現場で何かを学びとろうとした。1つの

作品を完成させるのにあつという間に100時間を超えた。

一方、ゼミでは、じっくりとはいかないが、番組制作の方法を座学で学び、1年かけてグループで15分の作品を制作した。いるプロとゼミでは、手法は異なるが、番組を制作する過程において実に多くの失敗を経験し、そこからたくさんの学びがあったと考えられる。例えば、グループでミーティングを行う際にまず「自分から意見を言ってから相手の意見に耳を傾けることが大切」だと感じたり、取材相手と打ち解けるために「まずは挨拶することが大切」だと発見したり、「結局、自分から行動を起こさなければ何も始まらない」ことに気づいたりなど、しかしこれらは、番組を制作することにおいてというよりは今後、大学を卒業して社会で生きていく上でとても重要なことだと言える。

また自分でテレビ番組を作ることで「テレビに対する見方が変わった」「制作者の視点で番組を見るようになった」と言ったコメントも寄せられて情報を発信する側の視点も芽生えてきたようだ。また、ゼミでの4作品のほかに2年生を対象としたプレゼミでの作品や映像制作演習で制作した作品などおよそ20作品は、第5回湘南映像祭に出品し、グランプリ受賞や入賞を果たした。学生たちにとっては、いろいろな意味で自信につながったのではと思われる。その一方で、いろいろな課題も見えてきた。

1) 大学における映像制作の教育理念の再検討

大学で映像教育を行う意味は何なのか、演習の目標はどこに設定すべきなのか、学生が実際に求めるものとの関連性も含めてあらためて検討する必要があると考える。

2) 演習環境の改善

映像制作は必ず授業時間内では終わらない。昨年、制作環境が整備されたにもかかわらず、2年目に入って感じるのだが、映像制作の授業が軌道に

乗ると時間外での作業が増えて、ビデオカメラや編集で使用するパソコンなどうまく行き渡らない状況が起きている。まずは使用制限時間を延ばすこと、そして将来的に機材や編集環境などさらに充実することを希望する。

3) 映像作品の質的向上

学生が作りたいと思う作品と大学の学びという視点から筆者が学生に作ってほしいと考える作品には、実はかなり隔たりがあると感じている。学生には、さらに幅広い教養や視野、コミュニケーション能力やコラボレーション能力などを獲得して大学がある地域に目を向けて社会性のある映像作品をたくさん作れないかと考えている。

また、作品が完成したら大学内上映会や他大学との交換上映会、地域に向けた一般市民への定期上映会など積極的に行って学生のモチベーションを上げていきたい。

4) 演習の継続性

1週間に90分の授業では多くの作品を制作することは難しいが、可能な限り学生にはいろいろなタイプの作品をできるだけ多く作ってほしいと考える。演習を継続することでより多くの学びがあるためである。

参考文献

- [1] 松野良一、『市民メディア論～デジタル時代のパラダイムシフト』（ナカニシヤ出版、2005）
- [2] 塚本美恵子，“日本の異文化間教育学の現状と情報メディア”『異文化間教育に関する横断的研究—共通のパラダイムを求めて—』（平成16年度～平成18年度科学研究費補助金 基盤研究B(1)研究成果報告書, 研究代表者:小島勝), pp. 55-79, 2007
- [3] 五嶋正治, 東海大学紀要文学部 2010

Educational value of the picture production in the university

by Majima Sadayuki

[Abstract] This study examines educational value of the picture production as the media literacy education. Examples I let a student produce a picture work in Chuo University Ryoichi Matsuno FLP journalism program seminar or Tokai University Masaharu Goto Mine studio wave, and to broadcast in local CATV increase, but it may be said that trial and error continues about education contents of the concreteness and the method at each university till now. It is important that I theorize it about educational value in the picture production from now on. Therefore I report practice of the picture production by “the professional whom there is” and the seminar that the writer is in charge of as the practice example that it is necessary to make a practice example accumulation, and is new. As a result, that there were various educational effects was observed, and the picture production practice was supported by the problem report by the student. I consider educational value of the picture production in the university.

[Key Words] Media expression, Information dispatch, A digital picture Practice education ,Picture production, Media literacy education